

## 一般演題：P1-1～P1-26、P2-27～P2-46、P3-47～P3-66

## P1-1.

## 看護職者の燃えつきと性格傾向および対処行動との関連について

(精神医学)

○清水谷真宏、丸田 敏雅、飯森真喜雄

(公衆衛生学)

小田切優子、大谷由美子、下光 輝一

(デンマーク国立労働環境研究所)

Tage S Kristensen

【背景と目的】 昨今、看護師の燃えつきが問題となっている。燃えつきは自身への健康影響のみでなく、患者満足度や医療の安全性の低下を招くことが近年報告されており、看護師の燃えつきを防止することは喫緊の課題となっている。そこで本研究では、看護師の燃えつきを仕事のストレス要因、性格傾向および対処行動の関連性から検討し、その防止に効果的な方策を検討した。

【対象および方法】 大学病院に勤務する女性看護職707名を対象とし、Copenhagen 燃えつき尺度 (CBI)、臨床看護職者の仕事ストレス尺度、Eysenck 性格傾向調査票、対処行動調査票 (COPE 日本語版) を含む質問紙調査を実施した。看護師の燃えつきに関連が強い仕事のストレス要因、性格傾向等について重回帰分析にて検討した後、外向性と神経症傾向が異なる2つの集団において共分散構造分析を用いて、患者関連の燃えつきに関する諸要因について検討した。

【結果】 燃えつきは、仕事の量的負担および神経症傾向との関連が強かった。共分散構造分析の結果、神経症傾向が高く外向性の低い群では、患者との人間関係ストレスが高くポジティブな対処行動をとらないことが患者関連燃えつきを高めることが示された。一方、神経症傾向が低く外向性の高い群においては患者との人間関係ストレスが強く影響し、あきらめという対処行動をとることが患者関連の燃えつきを高めることが示された。また両群とも、仕事の量的負担、質的負担の大きいことが患者との人間関係ストレスを高くし、それが間接的に患者関連燃えつきにつながっていく可能性が示された。

【結論・考察】 患者との関わりから生じる燃えつきの

防止に対処行動が強く関連し、また対象者の性格傾向によって有効な対処行動が異なることが明らかとなった。今後、性格傾向を考慮した対処行動技術の獲得が燃えつき防止に有効か、介入研究等で検証していく必要がある。

## P1-2.

## BMI による呼吸抵抗に及ぼす影響の検討

(大学院単位取得・内科学第一)

○阿部 哲也

(内科学第一)

河野 雄太、杉山 伸也、杉山 憲弘

中井美智子、大久保仁嗣、吉田 強

長手 聡、瀬戸口靖弘

【背景と目的】 MS-IOS (Master Screen impulse oscillometry) (Jaeger) は安静呼吸下、中枢及び末梢の呼吸抵抗を区別して評価することが出来る。この、MS-IOS を用いて肥満が呼吸抵抗に及ぼす影響を検討した。

【方法】 2005 年より 2007 年の 3 年間で測定した健康者 144 名 (BMI $\geq$ 22: 52 名 年齢: 25.3 $\pm$ 7.1 歳) それぞれに対し、R5% (全肺呼吸抵抗)、R20% (中枢呼吸抵抗)、末梢呼吸抵抗 (R5-20)、AX (末梢肺リアクタンス) を座位姿勢にて測定し、BMI との関係、IOS の各パラメータと対比検討を加えた。

【結論】 BMI $\geq$ 25 の症例において R5% (全肺呼吸抵抗)  $\geq$ 25: 112.6 $\pm$ 29.9SD  $\leq$ 25: 89.0 $\pm$ 2.1SD ( $P=0.0012$ )、R5-20% (末梢呼吸抵抗)  $\geq$ 25: 19.57 $\pm$ 8.01SD  $\leq$ 25: 4.94 $\pm$ 6.06SD ( $P<0.001$ )、AX (末梢肺リアクタンス)  $\geq$ 25: 0.33 $\pm$ 0.19SD  $\leq$ 25: 0.19 $\pm$ 0.005SD ( $P<0.001$ )、BMI の増加が、末梢呼吸抵抗の変化に影響を及ぼす事が示唆された。